

穀物のレースを何枚もあんだ 甲が赤外が青
 2Pの黒のマントをこくり 帽子もあんだ
 冬の寒い時の仕事にはこれが役に立つた

糸帯のあまつちものゴバの4リ-ウのゴタ
 りがゆをのんだり はぎれのまゆりをレースで
 あんだり と家の中へ差こんだ 2リ-ウのあつ
 のしかつた

家の外も花ごいのばいんち

家の中に花台をあき 「サイネリヤ」 ウィンド
 ーの下に 「君子ラン」 季節を忘れて 「セアニリス」
 「リ-ガベゴ=ア」 「サフイ=ア」 「アブユ=ア」
 「アヒム」 「シクヲメ」 「カ=ニヤボラレ」 「ホ
 -ヤヲカ」 「アマリリス」 「アホウクスフセリス」
 「アザレ耶」 「バクニエ」 「バクニエ」 「タイツリ
 草」 「オランコエ」 「旦々草」 「カスカリ」

外には 「トリトマ」 「ヒラキニカ」 「亮のヒ
 ゴ」 「アヒエ」 「ゆきの下」 「ツバ成子」 「ハボカレ」

玄壇の目があるをいすの「キリスルラレ」
 「金の存子木」

青樹んむろつた 「カント」 「沈下花」 「草福の木」

はたうしてしつた。

裏の「アジサイ」は、ほろ株のふえ花の身長いさ
いにアジサイの花は毎年咲いた。

「エニシキ、モキ園の外で大きく育った。

美敷の西側のカベにはうせむ「つた、む 野
花ばかり冬になると虫が、いじ結極全部取っ、い
そつた。「ヒマラヤ杉、も大きく育ちあがて、
やはり育つてしつた。

敷地の少ない所には木は少ないが、今裏の
マツとヒノキのは「エニシキ、カマゴ」のみ
それと何年か前ドリボーが入った所、おそわ
りえんじ「春木の子木は育ち、とて言うれ
根をから取りおとされそれでも今私の春木が
るいれつた、い、植物、こつた。

今花はほむなり、隣し、自分と面鏡
が見るれまいのなまの、任すなり、任すなり。

あゆみれつた。葉の美しい「コリリス」
「フー」
「フー」
「フー」
は花を伸ばし、顔
ほじの大き、わり花はし、花がらに、あ
も大き、い、ど長もちした。

忘れずにとて、つけ、こうある。「台せん」
「かん国」での仕事。

台北の旅行場について。類々知りの道標
がむかえに事ごとく事になつていふ。しか
しおれ右つとも通はなぬ。住所も電話番号も
きいていふがた。単に主~~主~~催者「林さん」に
けりけりかきかきおもす。夕日がおちる
夕暗くなつていふ。道を右にひいて「あー」
かえり、と思い目を人の最終頃のそつと
り「カウ」のそつと行つた。おれは「ほら」
といふ声かした。耳をおもおと左しか日本路
に「現在」おれかえりて通訳の「ようさん」がいた

時分はルースときいていふが知方近らに
ておれさん来たさるるをいふ。ほじりてのお
どろきだ。それから主催者の「林さん」奥さん、
その他「林さん」の会社の人達のいふ「レストラン」
1. 歓迎の食事、次から次とおどかす。

アト見ると林さん、奥さん、大さきおほいさぐ
らいのエメラルドの指物、その手ぬら「トレン
ク」の印物がおれ~~おれ~~おれといて、あーよど

れ21子ウ、指少存と持、2uなわ私心配に
 なる、とわわく返かう次とと大盛のお皿が事
 3. と2も食うまわぬ、すると年輩の才が
 自分の「ハシ、下こわい」存の私のかまへも
 22らぬ2、身りかとろ、エビの皮存とが子一
 プルわう、げん、そこの床とあつ、床は土
 の子系、「にわとや」がフコい2食て3、「にわと
 や」が食て存の指少かのば、大子存とニ一
 の~~を~~を⁷³¹²捧、右と左がどいどい目映し2う、
 家へ捧、2かえつ、2角利甲あまろろだ、大変
 合理的なと思つた、ビニ一を捧、右と左や
 「にわとや」がわい存く字ととまわいん片可う2
 22、存子存とぬ一感心した。

次の日の、通訳の「ヨウさん」と台北、台
 南、台南、高雄と講習をしていらる事とす。

林さんはじめのよう之人もとても親切、辞肉
 が有りな縁原さんの奥さん(幸いさんといふ)
 鞍山といふ所へつれて行つてくれり貴金庫と
 屋之人が、そこのはじ^お物^りルビ一のそのまわ
 りたが力中が有る指少を見右、美しい、赤い

先は平ふし、指さすなど、あつとのなうな
 「うな一」と思った、車とせんさかんにネガ
 2の交端してくれば、そのうたの率さ
 へ「かま」す、まろ」と居る去、思ふがあれ
 ほしい」というが私の~~指~~^指をとりどんどんあつて
 いた、あつと居の人が何か言ひまがら遠いか
 けの事、そこから交端するのだ、道路の甲であ
 れた言、ついでがやがて交^三端或居るもど
 る、日中四つ方くらいた、日中が零ろと60
 分くらゐあつたのか、そこで婦や妹の両みや
 げと^息「ルビー」2と「ヒスイ」のブレス2と、「サング
 のブレス2と買、た、今も「ルビー」大粒に1と
 いた、実は結婚した時どんなに物ごもしい
 指がはにかつたのだ、

さて仕事台地から同じ行くほど回舎で生活
 の環境も善化して来、若山そ後の足を洗う
 所があり、これが美容室のこやとづーが平さわろ
 の椅子所があつ、もちろん万巻に下をぬいて
 2のびんや水（お湯いらい）が流れたらさら
 流れる、食事もちが、と来、まづい行くた

時の朝食、古い不幸の境内でのことと通張の「よ
う之」が「おまを汁」なる大木夫？と言つて
境内のほじかき場、つまりくわ、横長の器
に炭が一匹のたていゝ。お腹は器のしおみ、顔
と腹は外れ去つていゝ。その部分お生、腹の部分
が器のしおみ一匹変えつていゝ。おまを汁
をスプーンでかきとていゝ。たしかおまを汁
たがやけり、その炭がたけり、すまを汁は「い
ろ」と手の指がたけり、おまを汁を指、つまり
「おまを汁」の炭、た。朝食は不幸の境内で取つ
たが通常の手がたけり、た。朝食は不幸の境内で取つ
た、とておまを汁を汁とくわ、た。おまを汁のたが
は、どうしようもない。

しかし「おまを汁」はよくおまを汁を汁とくわ、
日本のおまを汁、おまを汁がたけり、た。おまを汁を汁
とくわ、た。おまを汁を汁とくわ、た。

日本のおまを汁、おまを汁がたけり、た。おまを汁を汁
とくわ、た。おまを汁を汁とくわ、た。

とておまを汁を汁とくわ、た。おまを汁を汁とくわ、た。

字をいさ

さてカニ国での仕事、かつてカニ国といふ
私「どうなるのかね、という思いだ、たが
そとでたが、ていた。御並建物、人、もつと
おれのかつた下あなにかい岸の不潔しかおは
本人所たもの、日本国はと着つていふといふ
より国はより自由たみたが、ていた。

そがスエーデンは京城、鉄筋のとなりはトタ
この城、おこ小倉。このビルの中一層日本と
同じ場所トイしがあるがその狭路の中ごまっ
たをりかまのしをたそのまのビルおの岸
下をふく、トタのレのドアの内側に鉛筆のほ
が不ふ不ふ本をした、と天、片してある。

とにかく仕事スエーデン 境内ビル一ス
時同たたなと笑講官仕事た、イスの工ご
作らごを立て、此が女村かと思ふ二行儀のわ
るさ(文化のあか、い少か、ま)「何んが何ご
らにたか、これに「業教はあひすか」ととん
ごも存の笑め、取境たがみたごう月)まで新
をたごの二、たごたらまごにまつた、と思ふ

通訳が又唇のしがわかる。通訳をしないの
 資格を及ぶがたつ。「自分の考えを大い
 いで下ろし」と言、それもたつた。その上「秀正
 が孫、二行、右ものうのかえしとく子のか」
 と言、私は「直接秀正に言、下さし」と言
 たら、その人共名で少レづの肩へそに下
 へ行し。木通の主任者は「余軍有」といふ人
 城の講習の講出席してゐた。「その明か
 きの月でまゝ」といふ事についで講義を
 して、その人たちが正確な答を出した。朝
 鮮戦争の際に激してゐたその事正確な
 だ。その際私は「右いし右ものたはほめ右のた」
 それが云で親^親たつた。かゝる通、右のた
 子換へもたつし下へ行つてくた。たつた
 い校舎はそまゝだつた。中は右のたに
 いたが校舎の前の「トラの覆熱」はその子
 只トうは人が人分たつと、いふたつた
 無造作に存つてゐた。

繁盛してゐた商店がいろいろあつて、
 電氣屋など洗濯機が一つの店舗が5-6

にあるので、伯父の8野田の9店など欠けた
 いる、私の住んでいた家へも行って2年。
 中はオーストリア式になつて甲流のラス9人が住
 んでいた様だ、私が「ニイ牛牛と蒸豆の
 干干目野カイヤアセヒサ」といふがきのアデ
 夫そのまゝ、残つていた

どユクワムへも登つてみた、よく母の租
 母との字の石小さい山だが不が1年もなく
 岩と云ふやになつていた

それでも存つかしむところがなにかとかが
 しなや残念を成すやつかうな、宿泊先は
 ほか電球1ヶの窓のなにか子や新屋は存すや
 知つた、なれどこの新入の存やればな
 らないかと麻しかりた、昼間食事に行くと、倉室
 はこのやれあかつたイス、不夕お夕と雨もり9
 あり子一づい、身一外と2とも雨が降つて
 ったん傘をさして11人入は所とんどいな、
 雨の中平着で染つて、いふ古いおはここの下
 その国だ、

本邦の仕事を終つて帰州、筆ペンと送る

り、アニア友の〇〇といろとろでギヤウを
突中とるうとしたり「お余がな」と語り、かそけ
の船行様もな」といふ。

我々自身で船行様を拂いさつた帰りに
来た。何といふ國をギヤウも持参なるとは、
これに教わらなうなよ。

あの朝、^朝早の人が「この人が吊橋をなすが
いづい子か」と金栗有をたづねて来た。

そして我々の所へとめてほしいと語り、仕立
なく上野へつれて行き、倉裏を口木子屋をとり
やれやれとかえり、とこの朝^朝早く、午^午のイイがた
り又金栗有が、「これから大坂で紅葉がゆき」
ときろと大坂へつれて来た。そして大坂で清^清機
をいづる。栗^栗急イレの受仕の人にはこの人は
朝の朝^朝はこゝ下せいと栗^栗急イレにせり、「朝
日の朝^朝か」と、ドアをたたく金栗^{金栗}有をたづね
朝^朝早く、午^午のイイがたをしぎつへ行つた。

そして^{無事}無事かたつて来た。る可^{る可}電に「先古河
うをきつた」といふ。はつと午^午ばか云
みだううと思つていた。ところが又金栗有が

予はこれほどで香科の勉強を必要とした。
 とにかくせっぱの予は世に世の世。1
 年程のとめとがその学費はつなれてしまつた。
 受講料は並に香科が高い。ある程度の家
 持がなければ金銭に困る。生徒が少なくな
 り卒業生を1度去したきりになつてしまつた。
 職業の人を育てるとしつて思ふ。香科を
 そうなれば接客士会など、予がスレがく。發
 講のシステム、講師養成、全国大会の開催。
 などそれとばかりに思ふ。その取組む
 べく予はそれと身につく。
 講師業が私を育て、くれた。
 この香科、修士課程が終つた。2か3、2束
 のこの年内苦勞も多かりたう。予は
 銀貨の袋を裏かえして保つていた。最初には
 入、2いふが更かえが有り仲間と
 たりて共同生活をした。当番が朝食を
 取ると言ふ。2いふ。当番がお茶を
 取ると言ふ。2いふ。2いふ。2いふ。
 2いふ。2いふ。2いふ。2いふ。2いふ。

方、五、このも変る存い笑たたつた、やがて
 何か短く左口とすののど「それ何ぞ方か」と
 子と「ミテヨル」「エテミシ」とか言つてこの
 取付カゴリメレト存子もこののはじめこの出
 りいだ、「私もほしいな」と思ひ「いゝど異ミテ
 何か」すゝと電話番号を教へてくれた、すゝ
 と電話をひりあへるといふ、一年くらゐこの
 いたたた、不思議なことに電話をしなると
 とは方か、たふかす送るとする、何故か、退
 謝態度とゆう^所とはず一とみとにたつてあか
 つた、さういふばあはあ胃カインにたつた時
 やはり大内先方の紹介で室野哲寛先生のと
 りで無色無味無臭の1204をいといふのを
 ひりたるとかひり、細シリリットルくらゐの
 たつたが半年も取らないうちの存あつた、こ
 のた経験がある、その時やはり大内先方のあす
 けで「クドレコソ」といふのを珍寶安んか
 御同か買つたエヒがある、健康食品だ、それ
 子りやめつた、たが健康といふ事に関心
 したつた、そいでシヤウリ一といふ健康食品

の勉強会へ通った。茂木さんといっしょに話
は充実した感じになった。如同くは、運、何かを、
食に打ち込みを考へるに打ち込める「^レカケル」^一に
一生懸命になった。

相対しきほ：うなづいていた。おしえてくれた
た大竹先生 → ○○ (名前もあわてしきった) →
武蔵 → 茂木さん → ○○ → ○○ → 会社 私が食
おれればとへたとその金額がその人達の売上
となり収入となる あり様私に製品を送ってく
れたいと武蔵さん、私を正式にそのメレバー
にすることをめいするが自分の運糧を私に貸して
毎月170万円ほど入金されること ところが貴女も
やり方ないといっしょに

私は「^レカケル」^一、というサジョリメントが
しい。そんな仕組みはどうでもおいたメレバー
にはならないと存儲を要する。で私は人
一になる。おろし月末にたると武蔵さんにおろ
す月おろし「^レカケル」^一「自分で食べたいものがある
らんとおれがおいしくした」するでおどされて
この状況。私はだんがんにいかになる。

その新「何者存り」と自然にきいた味、彼等の
 答は32万34千と皆若い、私は58万しかも仕事
 の76%は私がしている。そしてこの年の大卒
 数は倍音、倍音に倍音の倍音、これからどう
 なるのわらう？ 「これから倍音倍音倍音倍音倍音
 よい」そんな事は成り立たなくとも、「やめよう」
 と思つた。そこで「私講習の仕事やめよう」と
 皆いふ、た。皆はかるとうけとめていた。

で年が明けた最初の理事会を欠席した。電話が
 なる。「どうしてこのご方か」「やめたので」と言
 ったと理事長が私の家へ来た。お正月のゆづ
 るうを去しおめたと言つた。彼らは「僕達を
 見方22のご方か」とも言つたが私の氣持所
 事代有2事は存かつた。

それから半年経つた。仕事の手達は入つて
 いたのだが全額返済もまだ2ヶ月は存かつた。半年
 年経つて仕事は取くなり給付決定、2果ある、
 人分りとどうして下ろ。今迄「はなして、うけ
 ーんぱんこのア」と、そして講習もやめようとして
 困るが事業の美容室の仕事は存、そう思う

と又天壽が去つ来た、

来居の天壽橋の赤づらりの小料理をとし、
 駅前からのイベントを一つづつした。新年会、忘
 年会、小旅行、食事会、これは又古のしかつ
 古、シヤクリーの時代はバスをセキ一ターをこ
 シヤクリーの日本工場へ宮本とをいふが今度
 はお泊りをおさくし回数をおさした、これぞ人
 知は小まらばしつかり天壽が来りていした、

そしてもう一つオバールが介在した、かつ
 て空橋矢方はいろいろおしよるもろゝだが、
 音楽としてオバールの勉強会へ出席、知らな
 いことと知らずの所業し、お向平の午の所、
 勉強会の場所がちかぢかになり歌舞伎屋で
 担当の吉田さんのおかえんまつら、おま
 分り、吉田さんのお顔を見てくれた、

オバールの様子は17種の植物のエキスがあ
 ること、きり傷や痒い、虫さされ、口内炎におわ
 にも有効であり、肌のトラブルがなく左
 キメの細かい肌になる。それは私の肌で理解さ
 来た、オバールの会社もいろんな化粧品が

まつといろのはつらうといろか苦しくといろ
か死は吐いてしきう。

やがて迎むらゆの両手を取って先方を入、
て来た、30分後の先方の部屋に来ると
いかに 部屋へ行、右 キーボードの工に
の川を流せしきもの木より、説明を
た黒いどろどろに木物が、
2) 黄緑色の木ガレのまわりもの、
白いと
ころに黒いもの木まじりの法、
脳細胞
の中にガレがまじりついで、
ろいた脳細胞を取ってしきうのた、
ろかにもガレを木まじり
ていた、脳細胞を取、
はじりておそろしき、
きりた。

手術後、妹、秀樹と交替で病^院へ行、
同時に 姉の病^院へ信の豆のまの知らせが来
ていた、では姉の信を片づける
ない、
主が病院で姉の病^院を
(おたけが)

人が一人死ぬという事は何と大乗存之とか
母の時は、哲有見之しそして十三の姉士に
右に現役の人が死を告ぐ云ふのと云う

これが殆ど申告というても現士さんにはた
たりのか、入院費の保険はどうな、云々のか
とかと云ふ事はかしの中華式、白紙の紙は
着かした、何とかがり云ふ

故やせんや香樹がいないか云うそのも出来
なかつた、二人共中庭に身がとる、

香樹「ツクバ、どうも号、外国へ自分の研究、論
文の講演と云うがしかつた

天が「ダイオキシン」の件でベトナムへ行き統
行用の「カビレヨク」の「サトウリレグ」ヨクの「カ
ビレ」をどうや、と運んだのか大乗だつたろう、

「かれ薬劑」のバトヤ中レ、ドロヤシ、のこしが
あつても實際には「かれ薬劑」をまいたこころへ
は入れなかつた、たか、でも「カビレヨク」の物を云
は「ダイオキシン」の問題解決になり、大乗を栄
となつた、しかし教授の云は右の「教授の立
川若右の名を云う、その後「イタリー」

「ブロン」 「イコ」 と自分の論文を探、
~~その~~ ~~中~~ ~~の~~ ~~一~~ ~~冊~~ ~~を~~ ~~見~~ ~~つけ~~ ~~た~~ (予立が、ていさ、ごめん
 講演をい
 なすい)

婦が死んだあとと香樹と妹と三人で旅行をし
 た。「文殊」香樹の車で行った。石の上の~~秋~~
~~新~~ ~~理~~ ~~不~~ ~~理~~ ~~の~~ ~~し~~ ~~か~~ ~~つ~~ ~~た~~ もろお懐
 い)ばいのととろへ臭たくしにすしでせいの
 のが乗った、何と暑の多いこと、大人になつて一
 緒に旅行をしたのは、はじめて、とにかく楽し
 かった。

そのあととすぐ香樹と二人で日光へ行、た
 いは攻をすいすいと登りて行く。はさほう
 したやれど香樹は平氣の登りき。この折「ゆが」
 新理というの~~を~~ ~~は~~ ~~じ~~ ~~め~~ ~~て~~ ~~た~~ ~~ん~~ ~~だ~~ 仕事で
 ちこそ行く、たやれどその土地その土地の名を
 を探さう事なると来たので、これは又物やがらし
 思ひをした。教子二人づねというのは、い
 のだ、かえり天竺ろ本だ、を食むた、たき
 うたがでお茶の工いれもり、うたが、てい
 しておいしくなると思つた、食べたことと

かつた。しかしこればかりじゃなかった。その後
 うなぎをたべたいという思いが湧いた。
 香櫨の車で大宮の駅まで、こもろ、たろ
 のみと「つくば」へ帰った。たろからかきりたそ
 くと、たろのたろろ、ありかところ。あやがとろ
 ひとつもない思い去った。

このめと美容の仕事を毎々がつづく
 海老の経路母でのチグリにサークルで「デュパー
 ジ」に出た。絵の表面をうすくはがして
 紙をもちこつくりをみる。「傘を」「絵」
 (カシニヨール)「めがね入れ、など購入、そ
 んなをさがした。あつた。あつた。「ガシ」の
 うえの月のものをもちりた。

そういえば香櫨からセシス太い物いろいろ
 もらった。

やしの実の花入れ、貝のイヤリング、キエ
 干玉となる砂、すかすのフクリ、貝の、貝の
 かがり(空の新からつるすをこぼす)
 新のこやし、フグのちえろちん、若のしかり
 のかがり、木工細工の厚、カメ、かきまろ

れない。せいの下さ、やさしさがこめられて
いる。お正月の装束などそのせいのサイを彫
刻のすばらしさ、金額は入って2階とある。

母と娘が2階にあるのが残念。香木のや
さしさは私の心をめたためてくれる。互りが
とろ。平巻とありかとうぬ。

平巻としろのは長くつづかない、66才の婦
女様容に在ってしき、た。

なにかあついなと思つて一入れと
おまめがた。そのまゝ、^たた「アー」と音が
たあれた。何行かと思いきがとてせつとた
おまめはたあれた。しばらく竟蔵が来た、た
様だ、ぬいぐるみももたらしてしき行：マ
としたが立つておまめさん、はつてしてし
たたりつら、用をたしたおとやけりあやあ
い必死でバツトで、しかしバツトは
おまめさん、しばらくバツトはたあれたボ
ーとしいた。えーとあつてあつと一つあつ
た左のあつたと思つた、そのあつたあつた
う。香木とあつたあつたあつたあつたあつた

丸) 教員中んのとさるへ子とてした。せつち
 もの字がらふい、夜中だも可なりそえだ、
 すてそもなき教員中んか、テレリがゆ、た
 「どうしたの？」私けとてと「たおれた、す？」
 と教員中ん「~~急~~車おふね、しげらくとると
 市橋さん、^{救急}市橋さん救急隊いり、手てえ
 子てか、「二階からおりて来て下さい、ゆらく
 りゆらく、そつてそす」といふ声、おしり
 びつた「おがら階段をおりとかく水をかぶか
 ぶのさ、そいって甲をゆする。

とてもてても靴の中だ、た、夕ンカ一へのせ
 「靴は脱ぎ、そす方から」「おすも可なりそ方あ、
 とそして中央病院へ、担当の先生、血圧計の
 て懸計、て「今日はいいからおかえり下さい」
 私バットからおりてとておすそ、看護
 士さんの手紙、そもろいバットを下げると席
 下にあり、昼間若狭甲の暑うすてじろり、泳つ
 たまがはたいた、しげらくととていいた、
 すて白糸を着た男が「どうしてした、と声
 をかきつくれた、家に帰りたのて夕三

を上手に下すの、とたのて、私も同じ方々に
一ノ運転子がむかえの来た、そして窓の=階
迄死を運りてくた。

私は自分のべつとで木とやりいりた。

「母とし 母とし!!」とけたた子とに争がし
しと秀研がかかたつて来たてくた、そして水
をの子せてくた、教士やんにアレクゴア
これ、自分の運転とあぶるのと思ひ文句を
て来たてくたのと、おもまの教士やんも
来てくた。=人^井場邊のの、アッバと、
子たのまをかえつて思い

そのころ秀研は4基、教士やんの所帯の
た、島津病院の真滴をしてるの次の日MR
Iととりて西大言病院へ行くた。

「MRIのこのガスと水とを同時に吐き出し
た下の方のもの、最初は5秒、次に10秒、最後の15秒
秒、終つた時は立ちあがらない、秀研と教士や
ん二人のまをえりかえつた。

病名は脳梗塞だつた。

それからのくりいんたのが通常とアリの

婚式の昔「結納」の在り敷き世に二人^{島へ}
 行、在。久しぶりの新紅線九のしかつた。
 言ふ言ふ婚式や世に二親が、昔か「^忘夕
 り」とは言元「結納」のつた言ふ。昔はその結納
 金で新生活の準備したるがたが何存のかを
 とにかくそろい席ざらした。その席で「^忘
 や？」と思つた。それは此の生活習慣の古なり
 が、皆そこからスタート言ふ言ふ。

帰り美術館のより「ロートショップ」の小さる
 七足、こかえつて来た。

それか結納式の両家が島へ。小まぐち、そ
 りかと思つた。二いれが主席者の多さの万とろい
 た。両家で40人くらい。市橋の矛は番橋の世
 話に在、古は右手百人、200人。同姓家は着物
 毎の矛、とれれく知らる人ばかりだ。丸て一
 プルの先、矛の所を言ひさつして言ふた。
 当人達は大変だ、古と思ふが私に古く古に
 つかれたい言ふた。

とにかく「よか、よか、よか」と帰、て来
 た。

秀樹達は二三日の間に^心へ旅を、二行の足
 跡の一つの足跡かた 言うなう - タイペイト
 が終、たのど 何かへなへなと登りた心境
 た、たのかもしわたい、武の最中事神文のよ
 うあがの声は遠くそろにた。それはたの
 うたのか 「よくぞこの途を登して来た」とい
 うことか「何か一つの別れ」という思いがあ、た
 うかたからたのどが何かとあがのものをさ
 えていた。

結核は自力でいろうと登るたのどろ
 えーとアールの~~物語~~_{×247}をたがし三層のお宅を
 おじいさんのスーフはおおめさんには似あ、ていた
 たおじいさんの手はどろろと~~たのどろろ~~
 櫛^櫛たのどろろとたのどろろ、たのどろろと
 しよう、ごめん人はたまにたのどろろとたのどろろ
 たのどろろ、たのどろろと どのを幸た
 しかし私の手元には^{たのどろろ}のどろろと一枚
 を^{たのどろろ}たのどろろの二人の^{たのどろろ}
 外、たのどろろとたのどろろ、たのどろろと
 のどろろ、たのどろろか

だのみ、「こんなおんなが女とてまじい」教士さん
 がよく言ふ。「お母さん、2月ぐまわていよ9
 ね」

母を頼めて13年用、友達に「大善ね、
 「かんぱ」
 の22のね」といふねの女そんな事は至れ、
 子どりでいらいろ助けてくれまのて日々事な
 んだ、

お一教士やんはけいもやせしとていよ3や
 の2くれま、秀嶽一家ともうて行つて
 し、こ27年何毎週月曜日に来て下さる
 医の芳賀先生、申し分ない日々だ、

沈黙干し、掃除を右のねでいよ2ハルパーの
 はなやま、それ音がそれらに話事の空し事な
 といふものハルパーの終り年^アが4、ほか
 り、自分が思う所を人からいよいのね、もう何
 も言ふ事いと思つてやはりこぼしてしよる、
 とかしハルパー一ハルパーのまひくい人がまひ
 し、バカにまわす事ばかり、「し、かりしてす
 ね、それは万路も去るのね」「おら、まはれ
 とぼてすよ」とか「おれ絵をまわれば」おしやま

「左の山」と云ふは、本学はボヤク山といふ
か否か？

「左の山の人物関係は？」~~山~~として入るに
入る として入るに強い人物に左を左にすればと思
うものゝ、左の山が、として入るに弱い。自我
中毒、帯状疱疹、胃力不足、として入る
に弱い病気がありしといふ

「左の山」も助けてよといふ、助けてよとい
ふ人がおおい。最近はお茶を飲む。芽生えは
何だかんだ言、とも思ふといふのだ。

この13年用何の変化もなし日を重ねて来た
様だ。二山からもうそんな日だつていふ行きの
だらう。今年も二山が好方にならうか84年に
戻らぬか変化はないのだらう。

「中野のこと」として書こうと思つたの頃
今年春の春の春だ、なのだ。皆みんが春の半
の出来ごと。

それらを答へたしでしてしてのたが

名をいへるか打若らしのたが

原之祖欠は妹がのたがを美形たが

たがを城名の成隆けの創生たといふこと

祖欠はかたりお今を候たがうた いわ

うけつたてた財産をいらしらるる縁に甲し

たといふこと物種たがうたと園へ野

を知らせるうたたのた

祖欠は「いふ」など意味とし

いたらし。音がよくあつた美形たとき

く、その祖欠の人路もや男子をうた

祖欠は男の子た人たのた

欠は男、たが、上の二人は早し

て実家と岩月た

欠は「いふ」の親をた

たの「いふ」の親をた

欠は地丁の研究をして以後は甲学の教授
をいへた。祖欠を三から莫大な財産をも

つていふと言ふ 新築婦人、妹のそれよりも優
 の持病舎をもちせし嫁のやと言ふ、といふ、
 家一軒3000円を買ふといふ時代の金額だから
 はたりのものな。

父は子煩悩なところがある。冬になると夕
 マジの入つた「かきもち」を針灸に通して部屋の中
 へい煙燻たけしたりする。それが自然に下へ
 落ちるとかある。するとそれだけ火鉢でや
 「かきもち」の下へ「かきもち」はあつた。

父は妹をたきもちがと妹のせいにして「かきもち」
 をたきもち。そして「おちたからや」といふと言ふ
 「かきもち」をたきもち。

2.3 煙たけのたき「かきもち」を思ひ出す 今付
 取、いふ「かきもち」の見かたをいふ。

母は9人兄弟の下の下から3番目。母は
 1番目の才女と母は、母は小学校は愛知県
 だが中学校は不満へ来たからとまじ、作業者
 が第1次大戦とつたから私は下32に2に
 い。弟はも君といふ大屋君にたきもちと東君
 する大の初代交長の第1次大戦の423へ送る

(2行) たとき、おじいちゃんもおばあちゃんも
 へたも不満だつたらしい。明治も天女の世話
 としてはかたなり行動物存人だ、たのびろろ。

つよい人だ、たのびろろ。あ、こらんと
 徹夜始りしかつづける、でも母の事が子供
 のころはあきだつた、大人になつたか、と
 もあつかいと思つた。決して自分の思つて
 る事を言わぬ。言わぬゆれは楽なつ
 して行動しないとき、お母さんが、それこそ一
 とだ、とつて手におきな母だつた。

姉妹は、一番上の昌子は早くおとなつた
 面識はない。次の姉十三はやはりおとなの奇
 い姉だつた。子供の頃何か一緒にしたとか一
 緒に食べたとかお母さんだとかはない。

お母さんで外面がよい、お母さんのお母さん
 の評価は高し私の知らない面がかなりある
 ようだ。お葬式の折(姉十三子の)来り下さ
)お母さんの話を聞き、姉妹も私もお母さん
 とおどろいた。姉の事をよく知るお母さん
 のだ。

妹敬子(よし子) とてもおしこは読めない
 敬ちゃんだ この3年肉がーと肩倒れにく
 ね。その上セー女やバビヤマなども買ってく
 んだ。やさしい人肉だ。どこかろくのせさし
 すが去る来ぬのか、不思議な気がする。

私ははとうてい去来ない、こんな妹がいて
 幸だ 姉妹、ていっやーとしみじみ思う。

年を取る、ちねえろいろ存在のあつ人と去
 んでは人生感が変なかわしれない。

敬ちゃんはクラシックのバレエ教師、^{若い時}は
 バレエ団のソリストだった。アリの34
 2条に出入りした。バレエ団にいみころ、
 舞台の敬ちゃんも2つ4「おげちゃん」と香
 根が大声で言う事は存のかしい。

最初の店が原大子存家真木かざり、2敬
 そろいとは敬ちゃんのおじの2い2此の字真
 保しいな

1ヶ月に1度は来るといふ敬ちゃん、統一
 の探子をつぶして来るといふ。日々必要の
 のを売るといふ2層の好物を売るといふ。干)

て是を説く、とくはなり。殿の力にほをこし
 たりしつとくはなり。考之、みたり心にさす
 一に是を説く、とも、とくはなり。

中宮のありはなり。手づくりの物を一筋に
 心のなりしなり。これとも、なりはなり
 来りてのありはなりと語りかきなり。それ
 迄のなり、なりと日を送る。

いやな事がありと大衆が「あやうい」とさす
 断りの^{なり}のありはなりと語りかきなり。

指折りかぞえの子のは、秀樹一家だ。

私はずーと秀樹の応援団長^{のついで}にいたが今や逆

転 秀樹その人が私をささえてくれている

や当りよい器でうれしい。

秀樹の心一十一、美香、おあらかたや

しい人だ 一家の主婦と云うのは、うんち

事がある、中か、月一席は棄てくね。

銀行関係、友崎などやつてくれる おい

×(2×と云うとばはりきがない) だ。

友達のせいでと云う。

私のはマゴがいら、今中高一半皆 双子の

女の事だ、幼いころは私の具合が争り悪い

し遠くはいたのであり事はそれだ、だが今は

横須賀存へで以前下りあり今も又が負い

とこのくあくすく習ってほしい。エリカ、マリ

カと云う花の名だ、美しく花の輪いれ新